

3つのポリシーと アセスメントプランの見直しに向けて

近畿大学IR・教育支援センター 竹中喜一

本分科会のねらい

- 3つのポリシーの定義と意義を説明することができる。
- 3つのポリシー策定や見直しのポイントを説明することができる。
- アセスメントプランの定義と構成要素を説明することができる。
- アセスメントプランの具体例を3つ以上列挙することができる。

3つのポリシー

- ディプロマ・ポリシー(DP)
各大学、学部・学科等の教育理念に基づき、どのような力を身に付けた者に卒業を認定し、学位を授与するのかを定める基本的な方針であり、学生の学修成果の目標ともなるもの
- カリキュラム・ポリシー(CP)
DPの達成のために、どのような教育課程を編成し、どのような教育内容・方法を実施し、学修成果をどのように評価するのかを定める基本的な方針
- アドミッション・ポリシー(AP)
各大学、学部・学科等の教育理念、DP、CPに基づく教育内容等を踏まえ、どのように入学者を受け入れるかを定める基本的な方針であり、受け入れる学生に求める学習成果

策定と公表が義務化

- 学校教育法施行規則で規定(2017年4月施行)
- 義務化の経緯
 - ・諸外国の影響
 - ”From Teaching to Learning”(Barr and Tagg 1995)
 - 「欧州高等教育資格枠組」でLearning Outcomes定義(2008)
 - ・中央教育審議会答申での指摘
 - 教員の組織的な教育への参画、プログラム自体の評価を一貫性と体系性をもって行う必要性(2012)
- 策定と公表の意義
 - ・説明責任
 - ・教育改善

大学は、この省令で定める設置基準より低下した状態にならないようにすることはもとより、学校教育法第百九条第一項の点検及び評価の結果並びに認証評価の結果を踏まえ、教育研究活動等について不断の見直しを行うことにより、その水準の向上を図ることに努めなければならない。(大学設置基準第1条第3項)

3つのポリシーのつながり

卒業時に何をどこまでできるか
(ディプロマ・ポリシー)

どのようなカリキュラム
を用意するか
(カリキュラム・ポリシー)

在学中(卒業までの途上)
に何をどこまでできるか
(カリキュラム・ポリシー)

入学時に何をどこまでできるか
(アドミッション・ポリシー)

→ 達成度評価を可能なものにする必要がある

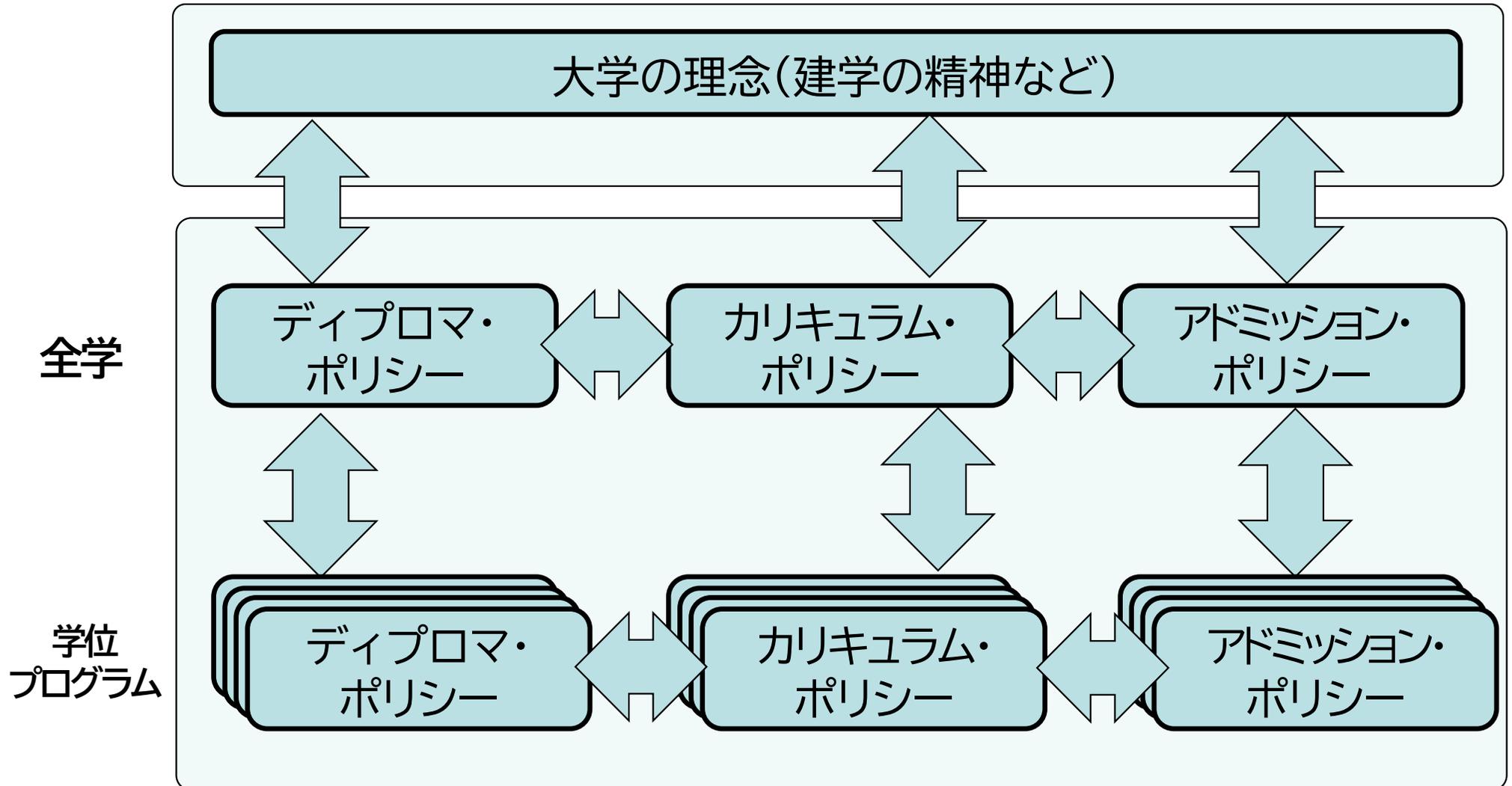
逆向き設計

- 教育目標、評価方法、学習経験と指導を三位一体のもとして設計することを提案するカリキュラム設計論

(糸賀ほか編 2017; ウィギンズ・マクタイ 2012)

- 「逆向き」とよばれる理由
 - ・指導後に考えられがちな評価方法を予め考える
 - ・卒業時の学修成果からさかのぼって、学年末、学期末、各科目の学修成果を考え、教育を設計する
- 行きあたりばったりではなく、何を理解できるのかを明確にすることで、意図した学修成果に導ける可能性を高める方法論

3つのポリシーに共通する考え方



DPの確認ポイント

- 求められる学修成果が適切に表現できているか
 - ・学修成果を評価できるか(「○○できる」)
 - ・個々の学生や教職員が理解できているか
 - ・各授業科目の到達目標とDPが関連づいているか
 - ・領域に分かれているか
 - ① 知識・技能
 - ② 思考力・判断力・表現力等
 - ③ 主体性を持ち、多様な人々と協働しつつ学習する態度
 - ・所属機関の学生の目標として高すぎ／低すぎないか
 - ・社会(学生の進学・就職先など)や学問分野のニーズと合っているか
 - ・読み手に広く理解されているか

DPと個々の科目の関係

全学／学位プログラム／科目における目標の対応例

レベル	目標の記述
全学レベル	学生は、多様な読者に対して、文章によって効果的にコミュニケーションをとることができる。
学位プログラムレベル	経営学専攻の学生は、専門家や一般の顧客に対して、一般的なビジネス書式を使って効果的にコミュニケーションをとることができる。
科目レベル	この財政学の授業修了時には、～という書式のファイナンスレポートが書ける。

(ウォルワード 2013)

課題1 カリキュラムと授業科目の関係

- 所属組織では、DPと個々の授業科目における到達目標の間の整合性をとるために、どのような工夫をしているのでしょうか。
- 大学全体または学部・学科単位で取り組んでいることについて考えてみましょう。

カリキュラムと授業科目の関係

CPの確認ポイント

■ 教育内容、方法、順序

- ・「〇〇の習得を目的とした△△科目群を設定」
 - ・「〇年次に△△を、□年次に◇◇を学び、体系的に▲▲学の専門性を身につける」
 - ・「〇〇科目群では□□の習得を図るため、フィールドワークを取り入れる」
- 学生にとって理解可能な表現になっているか

■ 学修成果の評価方針

- ・「卒業論文でDPの達成度合いを総合的に評価」
 - ・「国家試験の結果によって認知領域の学修成果を評価」
- ※ アセスメントプランとして記載されつつある

※ CPは短い文章で全体像を表現するのは困難。そのため、より具体的にカリキュラムを説明するツールが活用される

カリキュラム点検の視点①

- CPと各種ツールの整合性
 - ・CPに書かれたたとおりに科目が配置されているか
 - ・CPと関連する科目はすべて書かれているか
 - ・CPと関連づけられていない科目はないか
- DPとの整合性
 - ・特定のDP習得に偏った科目編成になっていないか
(例:知識偏重になっていないか)
 - ・すべての学生に履修する機会は確保されているか
(特に、再履修や教職科目を履修する学生)
- 履修要項や履修モデルとの整合性
 - ・学生に周知しているカリキュラムの情報と齟齬はないか

カリキュラム点検の視点②

- 学生の履修行動との整合性
 - ・履修してほしい科目や順序で学生は履修していたか
 - ・再履修者が極端に多い科目はなかったか
- 各科目の開講実態との整合性
 - ・不開講になっている科目はないか
 - ・隔年開講の場合、全学生に履修機会は確保されているか
 - ・授業内容は到達目標やDPとの関連に沿うものだったか
 - ・旧カリキュラム適用の学生の履修に悪影響はなかったか
- 教職員や学生の認識
 - ・カリキュラムの内容を教職員が理解していたか
 - ・他の科目との関連を教職員が意識する機会はあるか
 - ・学生がカリキュラムを理解する機会を設けていたか

APの確認ポイント

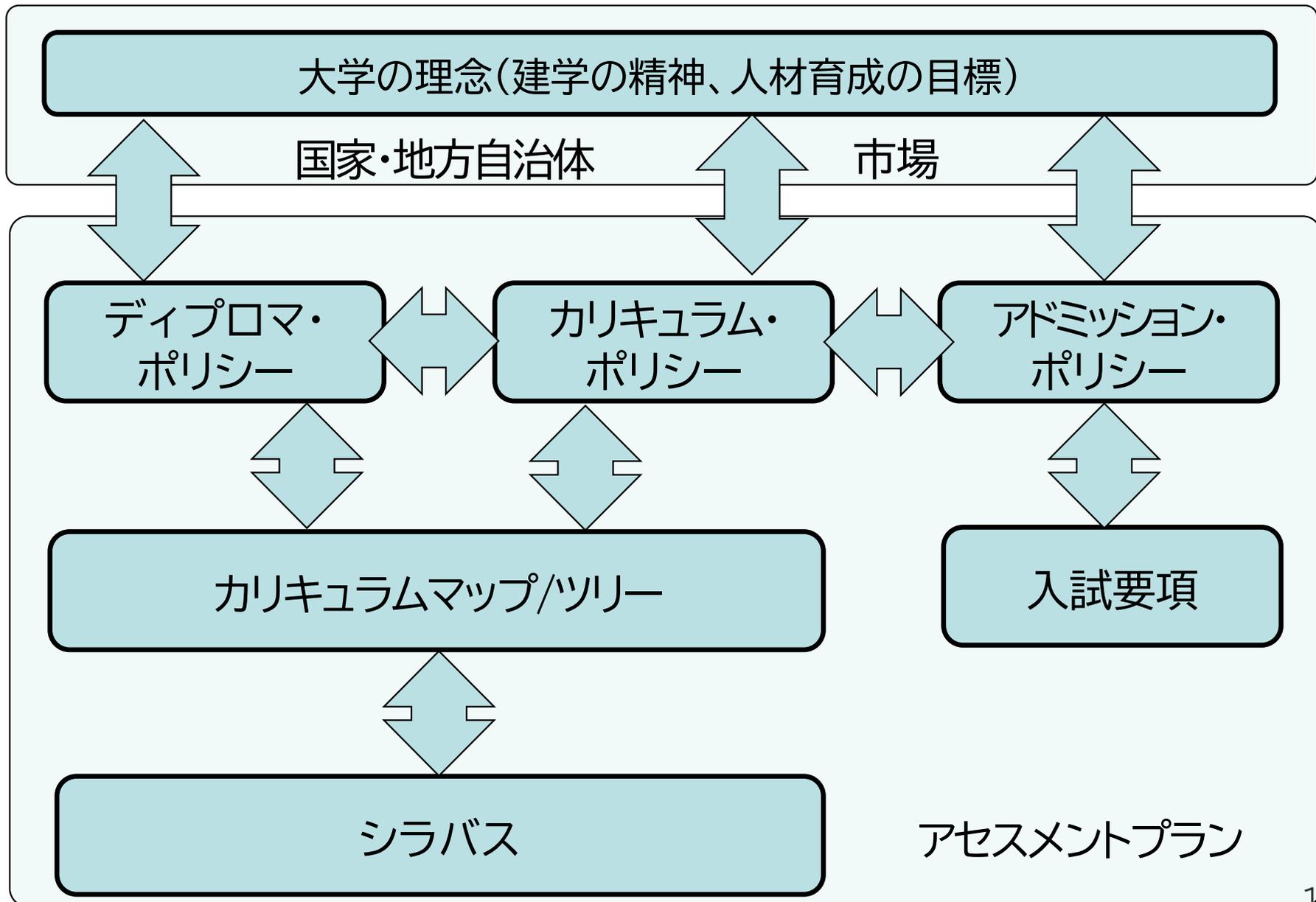
- 入学までに身に付けるべき能力
 - ・知識・技能
 - ・思考力・判断力・表現力等
 - ・主体性を持ち、多様な人々と協働しつつ学習する態度→ 入学希望者等が理解可能な表現か
- 入学者選抜の在り方
 - ・現状の入試制度への反映のされ方
 - 「教学マネジメント指針(追補)」でも指摘
 - 例: 求める資質・能力等と具体的な評価方法との対応関係を明らかにした表の作成
 - ・能力の内容や要求水準が受験者市場に合ったものか、多様な背景をもつ学生の受入れに配慮したものか

大学入学者選抜要項の観点

- APの策定・公表に求めること
 - ・DPおよびCPとの整合性
 - ・抽象的な「求める学生像」だけでなく、高等学校段階までに培うべき力とその評価・判定を行う基準や方法を可能な限り具体的に設定
 - ・学力の3要素(知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体性を持ち、多様な人々と協働しつつ学習する態度)について、各大学の特色等に応じて評価・判定
 - ・「何をどの程度学んでほしいか」をできる限り具体的に記述。高等学校教育の内容・水準に十分配慮
 - ・3つのポリシーの「ガイドライン」や教学マネジメント指針(追補)も参考に策定・公表

出所:「令和6年度大学入学者選抜実施要項」(令和5年6月2日付け 5文科高第369号文部科学省高等教育局長通知)

3つのポリシーと各種ツールの関係



アセスメントプラン

- 学生の学修成果の評価(アセスメント)について、その目的、達成すべき質的水準および具体的実施方法などについて定めた学内の方針

(中央教育審議会大学分科会 2020)

- 学習(学修)成果

学生が、授業科目、プログラム、教育課程等における所定の学習期間終了時に獲得し得る知識、技術、態度等の成果を指す。学位授与の方針において、具体的で測定可能な学習成果を定め、学習成果を評価し、その結果を公表することによって、大学の社会に対する説明責任が高まると考えられている。

(大学改革支援・学位授与機構 2021)

アセスメントプランの意義

- 学習成果の評価から改善までの過程の明確化
- 学習成果のデータを効果的かつ効率的に収集
- 学習成果の評価における各部署との調整の円滑化
- 内部質保証体制整備の証左

(竹中編 2023, pp.39-41,p.45,p.48)

→ カリキュラムの改善や内部質保証ができて
いることの説明責任の遂行を促進する

アセスメントプランの項目

- 学習成果
- 学習成果それぞれのアセスメントの方法
- 結果の活用
- 工程表
- 役割分担

(永田・山崎編 2021)

アセスメントプランの典型例

評価主体\時期	入学前・入学時 (アドミッション・ポリシー)	在学中 (カリキュラム・ポリシー)	卒業時・卒業後 (ディプロマ・ポリシー)
機関レベル	入学試験問題・入学試験結果 入学前教育プログラム 汎用技能調査 (GPS-Academic) 留学意識調査 留学生日本語能力試験証明書	学生アンケート (学生生活実態調査) GPA 単位修得状況 成績分布 留年者数・留年率 退学者数・退学率 休学者数・休学率 ボランティア単位認定実績 インターンシップ単位認定実績 留学プログラム参加実績 国際インターンシップ参加実績 資格講座開催・出席実績 資格取得状況 単位互換制度実績 文理融合科目開講・受講実績 学外組織連携プログラム実績	卒業者数・卒業率 学位授与数・授与率 GPA 大学院進学者数・進学率 就職状況・就職率 資格取得・国家試験合格実績 教員・公務員採用状況 卒業生アンケート OB・OGアンケート 就職・採用先アンケート
教育課程レベルでの 全学的取り組み	入学試験問題・入学試験結果 学修ポートフォリオ	GPA 単位修得状況 成績分布 出席状況 カリキュラムマップ・ツリー 学修ポートフォリオ 授業評価アンケート 国際インターンシップ参加実績	GPA 卒業研究・卒業論文・卒業制作 大学院進学者数・進学率 就職状況・就職率 卒業生アンケート 学修ポートフォリオ
科目レベルでの 全学的取り組み	英語プレイスメントテスト	単位修得状況 科目合格率 成績分布 出席状況 授業評価アンケート	

課題2 学習成果の評価方法

- 所属大学／学部／学科において、学生の在学中あるいは卒業時の学習成果(あるいはカリキュラムの実施状況)に関するデータには、それぞれどのようなものがあるでしょうか。
- それらのデータの活用について、できている点と課題だと感じている点には、どのようなものがあるでしょうか。

学習成果の評価方法

直接評価と間接評価

■ 直接評価

- 何ができるか？
- テストやルーブリックなどで学生の知識や行為から学修成果を直接的に評価
- 学生の学びのプロセスや行動を把握しにくい

■ 間接評価

- 何ができると思っているのか？
- 学生へのアンケートで学修についての自己認識から、学修成果を間接的に評価
- 学生の学修行動や経験、満足度も把握できる
- あくまで学生の主観であることには注意

策定・改訂過程での部局間の対話が重要

- アセスメントプラン策定・改訂では、複数部局が関与
 - ・入試、教務、学生支援、就職、情報システム、企画などの部署、各学部や研究科、IR部局
 - ・さまざまな部局がそれぞれデータをもっている
 - 全体像は誰が把握できているか
 - 手に入れたくても入れられないデータがないか
- 大学にあるさまざまな資源を最大限効果的かつ効率的に配分し、活用する方法について対話し続ける

教育コーディネーター研修会

- 愛媛大学の教育コーディネーターと関係教職員(約60～80名)を対象とした研修
 - ・講義による関係教職員の知識習得
 - ・ワークによる学部間あるいは機構との意見交換
 - ・各学部等への課題提示による教学マネジメントの推進

回	内容
1	<ul style="list-style-type: none">・「第4期中期目標期間に向けて愛媛大学が目指すべきもの」(学長)・「学習成果の評価の意義と方法」講義・ワーク
2	<ul style="list-style-type: none">・全学アセスメントプラン(第1案)提示<ul style="list-style-type: none">→ 学部ごとに意見交換<ul style="list-style-type: none">・上記の案について・アンケート結果活用の現状と課題について
3	<ul style="list-style-type: none">・全学アセスメントプラン(第2案)の方向性提示・学部等アセスメントプラン(第1案)の各学部からの報告<ul style="list-style-type: none">→ 報告内容に対する質疑応答、意見交換

本セッションのまとめ

- 3つのポリシーは学位プログラム(カリキュラム)単位で学修成果を保証(≒教育の内部質保証)するための基本方針となるもの。適切な策定により、教育改善につなげ、説明責任を果たすことにつながる。
- 3つのポリシーを見直す視点には、わかりやすいものか、評価可能なものか、相互に整合性があるか、といったものがある。DPであれば「何をどこまでできるようになったか」を学生等が理解できるようにする。
- 3つのポリシーは文言の見直しに加えて、シラバス、カリキュラムマップやカリキュラムツリーなどを用いることで、より実質化を図ることができる。これらのツールとポリシーの整合性にも留意する。
- アセスメントプランは学習成果の評価方針で、カリキュラムの改善や内部質保証ができていることの説明責任の遂行を促進する意義をもつ。
- 評価指標と評価時点のマトリックスがアセスメントプランの典型例である。ただし、決まった様式はない。策定にあたっては、どういった学習成果に対し、どのような方法で評価し、評価した結果をどのように活用するかについて、役割分担や工程表も含めて考慮する。
- 学習成果の評価には多くの部局が関わるため、策定の段階で関係部局と対話を進めておくと、策定や実際の運用が円滑に進む。打ち合わせの場だけでなく、研修会の場も活用可能。

参考文献

- 糸賀暢子、元田貴子、西岡加名恵(2017)『看護教育のためのパフォーマンス評価—ルーブリック作成からカリキュラム設計へ』医学書院
- ウィギンズ, G., マクタイ, J. (西岡加名恵訳)(2012)『理解をもたらすカリキュラム設計—「逆向き設計」の理論と方法』日本標準
- バーバラ・ウォルワード(山崎めぐみ、安野舞子、関田一彦訳)(2013)『大学教育アセスメント入門』ナカニシヤ出版.
- 大学改革支援・学位授与機構(2021)『高等教育に関する質保証関係用語集第5版』.
- 辰野千壽・石田恒好・北尾倫彦監修(2006)『教育評価事典』 図書文化
- 中央教育審議会(2008)「学士課程教育の構築に向けて(答申)」
- 中央教育審議会(2012)「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて(答申)」
- 中央教育審議会(2014)「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について(答申)」
- 中央教育審議会大学分科会(2020)「教学マネジメント指針」
- 中央教育審議会大学分科会(2023)「教学マネジメント指針(追補)」
- 日本高等教育開発協会(2019)『カリキュラムコーディネーター養成研修会<初級編>～組織がチームとして教育に取り組むための仕組み作り～』2019年5月25～26日芝浦工業大学芝浦キャンパス研修配付資料
- 竹中喜一編(2023)『シリーズ大学教育の質保証2 学習成果の評価』玉川大学出版部.
- 永田恭介・山崎光悦編(2021)『教学マネジメントと内部質保証の実質化』東信堂
- 文部科学省(2024)「令和4年度の大学における教育内容等の改革状況について」
- Barr R. B. and Tagg J. (1995). “From Teaching to Learning: A New Paradigm for Undergraduate Education”, Change Vol. 27, No. 6, pp.12-16